

読売新聞社賞 『過去より学び誇りをもって未来を切り開け』 橋本 萌

小学5年生の春に家族と訪れた蛤御門。禁門の変の際についた弾痕に触れた時、先人たちが経験してきた事の積み重ねが歴史であり、現代に繋がっていることを強烈に感じた。吉備国の史跡が多く点在している学区で育った私は、その体験により、歴史がより身近で興味深い教科となった。しかし、世の中には歴史を軽視する人も多くいる。職場体験で行った小学校の児童には面白くないと言われ、探究の授業で実施した、歴史に対するイメージについてのアンケートでは、暗い、過去の遺物、変化の激しい現代で問題解決の助けにもならない等、酷評が渦巻いた。

本当にそうなのだろうか。目先の今だけに囚われてただ前へ進めば良いのか。それは違う。変化の激しい現代だからこそ、未来を見通す洞察力が必要なのではないか。社会全体がどのような仕組みで動いているかを考え見抜いていく力が必要だ。

私は歴史こそ、未来に向けてどのように行動すればよいかを考える上でのたくさんのヒントが詰まっていると考える。八重の生きた時代も激しく変化を遂げた時期だ。新しいものを取り入れていく中で、自らの行動に自信が持てるよう先人たちの歩みを真摯に学び、それに基づいて自信をもって判断してきた。八重の「美德を以て飾りと為す」という言葉からも、常に学びを通じて内面を磨き続け、その中で自信と真の強さと洞察力を身に着け歩いていったことが分かる。

私の志は、自信と真の強さと洞察力を身に着け、変化の激しい現代に立ち向かう人材を育成することだ。そのためにまず私自身がしっかり歴史という学問に向き合いたい。その中でも考古学を深めていきたい。特に、吉備国と畿内の結び付きや大和との関係性に興味がある。フィールドワークを通じ、古代の人々がどのように切磋琢磨しながら生きたかを研究し、日々の営み、交易、はたまた国際交流、発掘される声なき物から人々の息吹を聞きたい。古代の人たちが現在とは比べ物にならないくらい限られた情報の中で、必死に生き抜いた証である史跡を探し出し、些細な情報も見逃さずフィールドワークを重ねてどんなに小さくても声なき物たちの声を拾いたい。そして、現代を生きる私たちのヒントを必ず見つけ出したい。今私は、些細な情報を見逃さないために人間関係を大切にしながら過ごし、探究心を持って日々の勉学に励んでいる。

そして、大学においては学芸員の資格を取得し、過去の人たちが歩んできた様々な出来事を、今の時代に置き換えて、未来を予測しやすいように、分かりやすく、おもしろく、正しく伝えていきたい。その中で特に、日本人であることに自信を持ち、国際社会の荒波に、八重の「本当に御国の為に役立つのは底力でございます」という言葉にあるように歴史に裏付けされた事象から自身が判断し、それに対して信念と誇りをもって、敢然と難局に立ち向かい、粘り強く、誠心誠意冷静に挑んでいける底力を養う一助を担いたい。